

## 第2回東北復興シンポジウム

[ 報告 ] 文責：山口琴子

日時 2012年1月29日(日) 10:00~15:00  
会場 河北新報社 ホール(宮城県仙台市青葉区五橋一丁目2-28)  
参加者 約160名  
主催 NPO法人アスクネイチャー・ジャパン  
後援 河北新報社

### (1) 基調講演「海やまのあいだに生きる」山折哲雄

海と山に挟まれたわずかなあいだに永々と生きてきた日本人の宗教観、倫理観、自然観について、日本列島を上空から眺めた光景を紹介しながらお話頂きました。

「日本社会形成の歴史と同じく、日本人の意識の深層には縄文時代の森林山岳社会の価値観があり、その上に稲作農耕社会の世界観、一番上にわずかに近代社会の価値観が乗っている。災害で危機に陥れたとき、深層に眠る価値観が表層に浮かび上がるのではないか。」

「東北復興が議論される過程で後藤新平が取り上げられている。彼の仕事の是非をここで問う訳ではないが東北の復興モデルとして東京を復興してきた方法を持ち出すのは適切ではない。東北の為になるのか、疑問がある。」

「パールバックの小説『つなみ』The Big Wave(1947) では家族を大津波でさらわれた少年が成長後、もう一度海辺に戻り漁師としてやると言う「覚悟」が描かれている。その土地で生き抜いていく人々の伝統的な価値観について目を向けたい。」

「伊達政宗が海外へ派遣した支倉常長は1613年小さな木造船で太平洋を渡った。江戸時代に、江戸でも京都でもなく太平洋の彼方をみて世界に眼差しを注いだ。そうした姿勢で復興にあたらなければならない。」

### (2) パネルディスカッション「東北復興への道」

コーディネーター 川勝平太 静岡県知事

パネリスト 山折哲雄 宗教学者

赤坂憲雄 福島県立博物館館長、学習院大学教授

安田喜憲 国際日本文化研究センター教授

坂田 隆 石巻専修大学学長

パネルディスカッションは「これまで技術や経済によって海と陸の境界、人間と自然との境界を人工的に確定してきた、『人間と自然とを分かち戦略』の限界が、震災によって露呈したのかもしれない」という赤坂氏の指摘に始まり、基調講演で触れられた「覚悟」について特に意見が交わされました。

「少なくとも若い世代に対してそのような覚悟を求めることができるのかという問いかけをきちんとすべき。生存戦略は、外から思っている程一色ではなく、時代の変化の中で複雑に柔らかく選んでいる。海辺に暮らす人が皆漁業をしているわけではない。海との関わり方の多様性も視野に入れて復興の形が考えられるべきだと思う。」

「今の社会は災害に対して防災、減災という対応をしようとしている。それも必要だがもう一つ、覚悟が必要。覚悟はこの自然災害の多い風土に生きる我々にとっては欠かせない。」

「津波が何回も襲うこと、それが人間のところに本当に覚悟を生むのかどうか。なぜ覚悟が形成されるのか。そのメカニズムをサイエンスの立場から立証しなくてはならない。」

「震災で孤立した数週間を過ごしたときに、役に立ったのは勘だった。」

「現地でも暮らしていると全国的な報道より明るい。人が亡くなるとそうはいかないが物は無くなっても案外平気。それが不思議だ。」

「関東大震災後、自然観、哲学、文学それぞれの分野で、大乾燥地帯の大文明に対する日本の辺境文明、モンスーンに着目した寺田寅彦、和辻哲郎、谷崎潤一郎がいる。森と海に恵まれた東北から新しい科学を発信していくことができる。」

## 第2回東北復興シンポジウム

### (3) 講演「グリーン金融と東北の復興」末吉竹二郎 国連環境計画金融イニシアティブ特別顧問

グリーン金融とは何か。銀行は誰のために存在するのか。地球社会が直面する問題の具体例や、21世紀金融行動原則を一から策定された経験を交えてお話を頂きました。末吉氏の「金融は、地域でしか生き残れない」「地域が健康でなければ銀行は病気になる」という言葉が参加者にどのように届いたでしょうか。

「世界が日本の行方に注目しており、日本は『優雅な衰退』を楽しむ国民、東洋のポルトガルになるのか、と見られている。」

「日本は「苟安におぼれるのか」または「苦しいが賢い道を選ぶのか」の選択を迫られている。」

「東北の復興の先に、21世紀社会が必要とする、持続可能な社会を築いていくことで、世界からの支援に応えることができる。」

### (4) 講演「ネイチャー・テクノロジーが拓く未来」石田秀輝 東北大学教授

東日本大震災から「暮らし方」や「ものづくりの価値」が改めて問い直されました。新しいライフスタイルをつくっていくために、バックキャストिंगのアプローチとネイチャー・テクノロジーの先端技術についてご紹介頂き、会場参加者とともに、未来の豊かさについて考えを進めることができました。

「このままでは文明崩壊の引き金を引くことになるかもしれない。」

「ライフスタイルを低環境負荷に変える商品、サービスを生み出すために、なぜ自然に学ぶのか。自然は完璧な循環を最も小さなエネルギーで駆動しているから。」

「18世紀産業革命の成功は自然観との決別」

「必要なテクノロジーを自然の循環から見つけ出す道筋がある。またそれは日本が得意としてきた。」

### ◎参加者の感想（アンケートより一部紹介）

「目からウロコが落ちた。落ちたウロコが元に戻らないようにしたい。」

「被災地ではなく復興地で東北から発信すべきですね。風化することの無いように。」

「楽しい、有意義なお話ありがとうございました。今回の災害を機に被災した義母とともに『生きる』を考えさせられる毎日です。本日の話を『こやし』に楽しく過ごしてまいります。」

「午後の講座が分かりやすく一般市民でも理解できる内容で大変勉強になりました。今までエコなど考える余裕がなかったですがこれを機に取り組んでみたい。」

「津波で浸水した地域にも入って生活せねばなりません、そこで生活し子育てしていく『覚悟』で海やまのあいだに生きていこうと思います。将来への希望をもって子育てをしていきたいと思います。」